

# 日蓮大聖人御書全集

ほつけしんごんしようれつじ

法華真言勝劣事

新版  
776  
〜  
786

ほつけしんごんしようれつじ

# 法華真言勝劣事

ぶんえいがんねん

文永元年('64)

がつ にち

7月29日

さい

43歳

とうじ

こうぼうだいしくうかい

しよりゆう

い

ほけきよう

東寺の弘法大師空海の所立に云わく「法華経はなお

けごんぎよう

おと

だいにちきようとう

華嚴経に劣れり。いかにいわんや大日経等においてをや」

うんぬん

じかくだいしえんにん

ちしようだいしえんちん

あんねんかしようとうい

云々。慈覚大師円仁・智証大師円珍・安然和尚等云わく

ほけきよう

り

だいにちきよう

おな

いん

しんごん

じ

「法華経の理は大日経に同じ。印と真言との事においては、

おと

うんぬん

しよしゃく

よしよ

これなお劣れるなり」云々へその所釈は余処にこれを出だ

す。

くうかい

だいにちきよう

ぼだいしんろんとう

よ

じゆうじゆうしん

た

けん

空海は大日経・菩提心論等に依って十住心を立て、顕

みつ しょうれつ ほん なか だいろく たえんだいじょうしん ほつそうしゅう

密の勝劣を判ず。その中に「第六に他縁大乘心は法相宗、

だいしち かくしんふししょうしん さんろんしゅう だいほち によじついちどうしん てんだいしゅう

第七に覚心不生心は三論宗、第八に如実一道心は天台宗、

だいく ごくむじししょうしん げこんしゅう だいじゅう ひみつそうごんしん しんごんしゅう

第九に極無自性心は華嚴宗、第十に秘密莊嚴心は真言宗

しよりゆう しだい あさ ふか いた しょうもん

なり。この所立の次第は浅きより深きに至る。その証文は

だいにちきよう じゅうしんぼん ぼだいしんろん い い

大日経の住心品と菩提心論とに出ず」と云えり。

だいにちきようじゅうしんぼん み

しかるに、出だすところの大日経住心品を見て、

たえんだいじょう かくしんふししょう ごくむじししょう たず みようもく

「他縁大乘」「覚心不生」「極無自性」を尋ぬるに、名目は

きようもん あ たえん かくしん

経文にこれ有り。しかりといえども、「他縁」「覚心」

ごくむじししょう さんく ほつそう さんろん げこん はい みようもく

「極無自性」の三句を法相・三論・華嚴に配する名目はこ

な  
れ無し。その上、うえ「覺心不生」と「極無自性」ごくむじしようとの中間に、ちゆうかん

によじついちどう「如実一道」の文義共にこれ無し。な

ただし、この品の初めに「いかんが菩提。ぼだい 謂わく、実のじつ

ごとく自心を知る」等の文これ有り。この文を取つて、こ

の二句の中間に置いて天台宗と名づけ、華嚴宗に劣るの

由、これを存す。住心品においては、全く文義共にこれ無

し。有文有義・無文有義の二句を虧く。信用に及ばず。

菩提心論の文においても、法華・華嚴の勝劣すべてこれ

を見ざる上、この論は竜猛菩薩の論ということ、上古よ

じようろん あ じようろんた いぜん ききよう た  
り 諍論これ有り。この 諍論絶えざる已前に 亀鏡に立つる  
ことは、 豎義りゆうぎの法ほうに背く。そむ

うえ ぜんむい こんごうちとう ひようじようあ だいにちきよう しょ  
その上、 善無畏・金剛智等、 評定有つて大日経の疏・

ぎしやく つく いちぎようあじやり しつびつ しょ ぎしやく なか  
義釈ぎしやくを作れり。一行阿闍梨の執筆しつびつなり。この疏・義釈の中

しよしゆう しようれつ はん ほけきよう だいにちきよう こうりやく  
に 諸宗の勝劣を判ずるに、 法華経と大日経とは 広略の

い さだ お くうかい とくたつと  
異なりと定め畢おわんぬ。空海の徳貴くうかいしといえども、いかで

せんし ぎ そむ なん つよ あんねん なん  
か先師の義せんしに背くべきやという難なん、これ強つよしへこれ安然あんねんの難なん

なり。これによつて、 空海の門人くうかい もんひとこれを陳ちんずるに、かたが

ちんとう あ しゆぎきよう ろくはらみつきよう  
た陳答ちんとうこれ有り。あるいは守護経しゆぎきよう、あるいは六波羅蜜経ろくはらみつきよう、

りようがきよう

こんごうちようきようとう

み

おお

えつう

あるいは楞伽経、あるいは金剛頂経等に見ゆと多く会通

そう

なんぜい

まぬか

とうじ

すれども、総じて難勢を免れず。しかりといえども、東寺

まつがくとう

だいし

こうとく

おそ

えつう

の末学等、大師の高徳を恐るるのあいだ、あながちに会通を

くわ

けつく

えつう

じゆっけい

な

もんどう

ほう

加えんとすれども、結句、会通の術計これ無く、問答の法

そむ

でんぎようだいしさいちよう

こうぼうだいし

でし

うんぬん

に背いて「伝教大師最澄は弘法大師の弟子なり」云々、

しゅうろん

こうおつとう

ろん

あ

うんぬん

また「宗論の甲乙等、かたがた論ずることこれ有り」云々。

にちれんあん

い

けごんしゆう

とじゆん

ちごん

ほうぞうとう

ほけきよう

日蓮案じて云わく、華嚴宗の杜順・智儼・法蔵等、法華経

しけん

こんけん

もん

つ

ほつけ

けごん

さいとう

の「始見・今見」の文に就いて、「法華と華嚴と齊等なり」

ぎ

そん

のち

ちようかん

し

こん

もん

よ

さい

の義これを存す。その後、澄観、「始・今」の文に依って齊

とう ぎ そん とう ぎ そん とう ぎ そん  
等の義を存すること、祖師に違せず。その上、一往の弁を加

えて、「法華と華嚴と齊等なり。ただし、華嚴は法華経より

先なり。華嚴経の時、仏、最初に法慧・功德林等の大菩薩

に対して、出世の本懐これを遂ぐ。しかれども、二乗なら

びに下賤の凡夫等は、根機未熟の故にこれを用いず。阿含・

方等・般若等の調熟によつて、還つて華嚴経に入らしむ。

これを今見の法華経と名づく。大陣を破るに、余残堅から

ざるがごとし等。しかれば、実に華嚴経は法華経に勝れた

り」等云々。

ほんちよう

ごんぞうとう

あ

ぎ

しゅうがく

のち

本朝において勤操等に値つて、この義を習学す。後に

てんだい しんごん がく

きゅうしゅうあらた

ゆえ

天台・真言を学すといえども、旧執改まらざるが故に、

ぎ そん

けごんぎよう

ほけきよう

すぐ

この義を存するか。いかにいわんや「華嚴経は法華経に勝る」

よし

ちん ずい

いぜん

なんさんほくしち

みな

ぎ

そん

てんだい

の由は、陳・隋より已前、南三北七、皆この義を存す。天台

いご

しよしゆう

ぎ そん

こうぼういちにん

已後もまた、諸宗この義を存せり。ただ弘法一人にあらざ

るか。

ただし、澄観、「始見・今見」の文に依つて「華嚴経は

ほけきよう

すぐ

りようけん

さいかく

てんだいちしや

法華経より勝る」と料簡する才覚においては、天台智者

だいし

ねはんぎよう

きよう

よ

い

ないしほつけ

なか

大師は涅槃経の「この経、世に出ずるは乃至法華の中のご

とし」等の文に依つて、「法華と涅槃と齊等なり」の義を存ぎ そん

するのみにあらず、また勝劣の義を存すれば、この才覚をさいかく

学んでこの義を存するか。この義もし僻案ならば、空海のくうかい

義もまた僻見なるべきなり。

天台真言の書に云わく「法華經と大日經とは広略の異い

なり。略とは法華經なり。大日經と齊等の理なりといえり

ども、印・真言はこれを略する故なり。広とは大日經なら

り。極理を説くのみにあらず、印・真言をも説く故なり」。

また「法華經と大日經とに同・劣の二義有り。謂わくい

りどうじしよう

にぎあ いち

だいにちきよう

ごじ

理同事劣なり」。また「二義有り。一には、大日経は五時の

しよう

よぎ

に

だいにちきよう

ごじ

しよう

撰なり。これ与の義なり。二には、大日経は五時の撰に

あらざるなり。これ奪の義なり。また云わく「法華経は譬

だつぎ

い

ほけきよう

たと

えば裸形の猛者のごとし。大日経は甲冑を帯せる猛者な

らぎよう

もさ

だいにちきよう

かつちゆう

たい

もさ

り」等云々。また云わく「印・真言無くんば、その仏を知る

とううんぬん

い

いん

しんごん

ほとけ

し

べからず」等云々。

とううんぬん

にちれんふしん

い

なに

し

り

ほけきよう

日蓮不審して云わく、何をもつてこれを知る、理は法華経

だいにちきよう

さいとう

と大日経と斉等なりということ。

こた

い

しよ

ぎしやく

じかく

ちしようとう

しよしやく

答えて云わく、疏と義釈ならびに慈覚・智証等の所釈に

依よるなり。

もと

い

さんぞうだいしとう

なに

求めて云いわく、これらの三蔵大師等はまた何をもつてこ

し

り

さいとう

ぎ

れを知るや、理は齊等の義なりと。

こた

い

さんぞうだいしとう

うたが

とううんぬん

答えて云いわく、三蔵大師等をば疑うたがうべからず等云々。

なん

い

ぎ ろんぎ

ほう

うえ

ほとけ

ゆいごん

難じて云いわく、この義、論義の法にあらざる上、仏の遺言

いはい

きようもん

い

きようもん

に違背す。たしかに経文を出だすべし。もし経文無くん

ぎぶんな

ば、義分無かるべし。いかん。

こた

いぎぎようしきぎよう

ゆぎぎよう

かんちぎぎとう

もん

くでん

答こたう。威儀形色経・瑜祇経・観智儀軌等なり。文は口伝す

べし。

と い ほけきよう いん しんごん りやく  
問うて云わく、法華經に印・真言を略すとは、ほとけ 仏より

きようけ 経家よりか、やくしや 訳者よりか。

こた 答えて云わく、あるいはほとけ 仏と云い、あるいはきようけ 経家と云い、

あるいはやくしや 訳者と云うなり。

ふしん 不審して云わく、い 仏よりしんごん 真言・いん 印を略して法華經と

だいにちきよう 大日經と理同事勝の義ぎ これ有りといわば、あ このこといずれ

きようもん の經文ぞや。もんしよう 文証の所出を知らず、がい 雅意のふごん 浮言ならば、

もち これを用いるべからず。もしきようけ 経家・やくしや 訳者よりこれを略すと

いわば、ぶっせつ 仏説においては何ぞなん 理同事勝のしやく 釈を作るべきや。

ほけききょう だいにちききょう ぜんたいさいとう よ よ しい たず

法華經と大日經とは全体齊等なり。能く能く子細を尋ぬべ

きなり。

わたくし にちれん いぎぎきょうしきききょう ゆぎききょうとう もん

私に日蓮云わく、威儀形色經・瑜祇經等の文のごとく

ぶっせつ ほけききょう いん しんごんあ

んば、仏説においては法華經に印・真言有るか。もししか

ききょうけ やくしや りやく ろくはらみつききょう

らば、經家・訳者これを略せるか。六波羅蜜經のごときは、

ききょうけ りやく くにやく にんのうききょう やくしや

經家これを略す。旧訳の仁王經のごときは、訳者これを

りやく てんだいしんごん りどうじい しゃく

略せるか。もししからば、天台真言の理同事異の釈は、

ききょうけ やくしや とぎ ほけききょう だいにちききょう しょうれつ

經家ならびに訳者の時よりの法華經・大日經の勝劣なり。

まった ぶっせつ しょうれつ てんだいしんごん きわ

全く仏説の勝劣にあらず。これ天台真言の極みなり。

てんだいしゅう ぎせい さいかく ぎ なん てんだいしんごん

天台宗の義勢、才覚のためにこの義を難ず。天台真言の

びやつけん

僻見かくのごとし。東寺の立つるところの義勢は、しばらく

とうじ た ぎせい

お びやつけん がんぜん ゆえ

くこれを置く。僻見、眼前の故なり。

てんだいしんごんしゅう た

そもそも天台真言宗の立つるところの理同事勝に二難

りどうじしゅう になん

あ

有り。

いち ほけきょう だいにちきょう りどう ぎ もん まった な

一には法華経と大日経と理同の義、その文、全くこれ無

ほけきょう だいにちきょう せんご すで ぎしやく にきょう ぜんご

し。法華経と大日経と先後いかん。既に義釈に二経の前後

さだ お ほけきょう さき だいにちきょう のち い

これを定め畢わつて、法華経は先、大日経は後なりと云え

だいにちきょう ほけきょう じゅうせつ るつう

り。もししからば、大日経は法華経の重説なり、流通な

いっぼう りょうど

と

ゆえ

しよりゆう

り。一法を両度これを説くが故なり。もし所立のごとく

ほけきよう

りかさ

と

だいにちきよう

い

ば、法華経の理を重ねてこれを説くを大日経と云う。しか

すなわ

ほけきよう

だいにちきよう

てきろん

とき

だいにちきよう

り

らば則ち、法華経と大日経と敵論の時は、大日経の理こ

うば

ほけきよう

つ

だいにちきよう

とくぶん

れを奪つて法華経に付くべし。ただし、大日経の得分は、

いん

しんごん

いんげい

しんごう

しんごん

くごう

しん

ただ印・真言ばかりなり。印契は身業、真言は口業なり。身・

く

いな

いん

しんごんあ

て

くちとう

口のみにして意無くんば、印・真言有るべからず。手・口等

うば

ほけきよう

つ

てな

いん

むす

くちな

を奪つて法華経に付け、手無くして印を結び、口無くして

しんごん

じゆ

こくう

いん

しんごん

じゆけつ

真言を誦せば、虚空に印・真言を誦結すべきか、いかん。

らぎよう

もさ

かつちゆう

たい

もさ

たと

らぎよう

裸形の猛者と甲冑を帯せる猛者との譬えのこと。裸形の

もき すす たいじん やぶ かつちゆう たい もき しりぞ  
猛者の進んで大陣を破ると、甲冑を帯せる猛者の退いて

いちじん やぶ すぐ もき  
一陣をも破らざるとは、いずれか勝るるや。また猛者は

ほけきよう かつちゆう だいにちきよう もき な  
法華経なり、甲冑は大日経なり。猛者無くんば、甲冑何

せん あ りどう ぎ なん  
の詮かこれ有らん。これは理同の義を難ずるなり。

つぎ じしよう ぎ なん ほけきよう いん しんごんな  
次に、事勝の義を難ぜば、「法華経には印・真言無く、

だいにちきよう いん しんごん あ うんぬん いんげい しんごん うむ  
大日経には印・真言これ有り」云々。印契・真言の有無に

つ きよう しようれつ さだ だいにちきよう いん しんごん あ  
付いて二経の勝劣を定むるに、大日経に印・真言有つて

ほけきよう な ゆえ おと い あごんきよう せかいこんりゆう  
法華経にこれ無き故に劣ると云わば、阿含経には世界建立、

げんしよう ちい ふんみよう だいにちきよう な か きよう  
賢聖の地位これ分明なり。大日経にはこれ無し。彼の経

に有るあことがこの経きように無なきをもつて勝劣しようれつを判はんぜば、  
大日経だいにちきようは阿含経あこんきようより劣おとるか。双観経そうかんぎようとう等しじゆうはちがんには四十八願しじゆうはちがんこれ  
分明ふんみようなり。大日経だいにちきようにはこれ無なし。般若経はんによきようには十八空じゆうはつくうこ  
れ分明ふんみようなり。大日経だいにちきようにはこれ無なし。これらの諸経しよきように劣おとる  
と云いうべきか。

また「印いん・真言しんごん無なくんば、仏ほとけを知るしべからず」等とううんぬん云々。  
今いま、反詰はんきつして云いわく、理り無なくんば仏ほとけ有あるべからず、仏ほとけ無なく  
んば、印契いんげい・真言しんごん、一切いっさい、徒然とぜんと成なるべし。

彼難かれなんじて云いわく、賢聖げんしやうならびに四十八願しじゆうはちがん等をいんば、印いん・真言しんごん

たい とうらんぬん  
に對すべからず等云々。

いま はんきつ い さいじょう いん しんごん な  
今、反詰して云わく、最上の印・真言これ無くんば、

ほけきよう だいにちきようとう おと ほけきよう  
法華経は大日経等よりも劣るか。もししからば、法華経に

にじようさぶつ くおんじつじよう あ だいにちきよう な いん  
は二乗作仏・久遠実成これ有り。大日経にはこれ無し。印・

しんごん にじようさぶつ くおんじつじよう たいろん てんちうんदै  
真言と二乗作仏・久遠実成とを對論せば、天地雲泥なり。

しよきよう いん しんごん きら だいにちきよう と なに  
諸経に印・真言を簡わざるに、大日経にこれを説いて何の

せん あ にじよう けだん しゆう あらた いん  
詮か有るべきや。二乗もし灰断の執を改めずんば、印・

しんごん むよう いちだい しようぎよう みなにじよう なが じようぶつ  
真言も無用なり。一代の聖教に皆二乗を「永く成仏せず」

きら だいにちきよう へだ かいじようぶつ  
と簡い、したがって大日経にもこれを隔つ。皆成仏まで

こそなからめ、三分が二これを捨て、百分が六十余分得道

さんぶん に す ひやくぶん ろくじゅうよぶんとくどう

せずんば、仏の大悲何かせん。およそ理の三千これ有つて

ほとけ だいひなに り さんぜん あ

成仏すと云う上には何の不足か有るべき。成仏において

じょうぶつ い うえ なん ふそく あ

は、瘧なる仏、中風の覚者は、これ有るべからず。これ

あん ほんげ ちゅうぶう かくしや あ

をもつて案ずるに、印・真言は規模無きか。

しよきよう しじょうしようがく むね だん さんじんそうそく むし

また諸経には始成正覚の旨を談じて、三身相即の無始

こぶつ あらわ ほんぬこんう とが あ だいにちによらい うみよう

の古仏を顕さず。本無今有の失有れば、大日如来は有名

むじつ じゆりようほん むね あらわ しゃくそん てん いちげつ もろもろ

無実なり。寿量品にこの旨を顕す。釈尊は天の一月、諸

ぶつぼさつ ばんすい う かげ み いさい むね

の仏菩薩は万水に浮かべる影なりと見えたり。委細の旨は

しばらくこれを置く。お

また「印・真言無くんば、祈禱有るべからず」云々。いん しんごんな きとうあ うんぬん

れまた、もつての外の僻見なり。過去・現在の諸仏、法華經

を離れて成仏すべからず。法華經をもつて正覺を成じ給

う。法華經の行者を捨て給わば、諸仏還つて凡夫と成りた

もうべし。恩を知らざるが故なり。また未来の諸仏の中の

二乗も、法華經を離れては、永く枯木・敗種なり。今は再生

の華果なり。他經の行者と相論をなす時は、華光如来・

光明如来等はいずれの方に付くべきや。華嚴經等の諸經

ぶつぼさつ　にんてんないし　しあくしゆとう　しゆ　みな　ほけきよう  
の仏菩薩・人天乃至四悪趣等の衆は皆、法華経において一念  
さんぜん　くおんじつじよう　せつ　き　しやうがく　じよう  
三千・久遠実成の説を聞いて正覚を成ずべし。いずれの方  
に付くべきや。

しんごんしゆうとう

げどう

しやうじよう

ごんだいじよう

ぎやうじやとう

真言宗等と外道ならびに小乗・権大乘の行者等と

てきたいそうろん

とき

こうおつし

がた

ほけきよう

ぎやうじや

たい

敵対相論をなすの時は、甲乙知り難し。法華経の行者に対

とき

りゆう

とら

しし

うさぎ

たたか

じやうろん

する時は、竜と虎と、師子と兎との鬪いのごとく、諍論

ぶんた

えりやうなずき

やぶ

とき

じていくらい

つ

は分絶えたるものなり。惠亮脳を破るの時、次弟位に即き、

そうおうかじ

とき

しんぜい

あくりやうふ

とう

相応加持するの時、真済の悪霊伏せらるる等これなり。

いっこうしんごん

ぎやうじや

ほけきよう

ぎやうじや

おと

しやうご

一向真言の行者は法華経の行者に劣れる証拠これなり。

と 問うて云わく、義釈の意は、法華経・大日経共に

にじようさぶつ くおんじつじよう あ  
二乗作仏・久遠実成を明かすや、いかん。

こた い とも あ ぎしやく い きよう  
答えて云わく、共にこれを明かす。義釈に云わく「この経

の『心の実相』は、彼の経の『諸法の実相』なり」云々。  
こころ じつそう か きよう しょほう じつそう うんぬん

また云わく「『本初』はこれ『寿量』の義なり」等云々。  
い ほんじよ じゆりよう ぎ どううんぬん

と 問うて云わく、華嚴宗の義に云わく「華嚴経には

にじようさぶつ くおんじつじよう あ てんだいしゆう ゆる  
二乗作仏・久遠実成これを明かす」。天台宗はこれを許さ

ず。宗論はしばらくこれを置く。人師を捨てて本経を存せ

ば、華嚴経においては二乗作仏・久遠実成の相似の文これ有  
けごんぎよう にじようさぶつ くおんじつじよう そうじ もん あ

まこと

りといえども、**実**にはこれ無し。これをもつてこれを思

おも

ぎしやく

だいにちきよう

にじようさぶつ

くおんじつじよう

そん

に、義釈には大日経において二乗作仏・久遠実成を存すと

じつ

な

いえども、**実**にはこれ無きか、いかな。

こた

い

げんぎよう

そうじ

もん

あ

答えて云わく、華嚴経のごとく相似の文これ有りといえ

じつぎ

な

ども、**実**義これ無きか。

わたくし

い

にじようさぶつ

しぐせいがんまんぞく

私に云わく、二乗作仏なくんば、四弘誓願満足すべか

しぐせいがんまん

べつがん

まん

そうべつ

らず。四弘誓願満足すんば、また別願も満ずべからず。総別

にがんまん

しめじよう

じようぶつ

あ

がた

よ

よ

の二願満足すんば、衆生の成仏も有り難きか。能く能く

こころう

うんぬん

意得べし云々。

と 問うて云わく、大日経の疏だい にちきように云わく「大日如来は無始むし

無終なり」。遥かはるに五百塵点ごひやくじんてんに勝れたり、いかん。

こた びるしやな 無始無終なること、華嚴・浄名・般若

とう しょうだいじようきよう 等の諸大乘経とにこれを説く。独り大日経ひとのみにあらず。

と 問うて云わく、もししからば、五百塵点ごひやくじんてんは際限さいげんあれば有始うし

うしゆう 有終むしむしゆうなり。無始無終は際限なし。しからば則ち法華経はすなわ

しよきよう は 諸経ほけきように破せらるるか、いかん。

こた い 答えて云わく、他宗の人はこの義ぎを存す。天台一家そんにお

いて、この難なんを会通えつうする者もの有り難がたきか。今いま、大日経だい にちきようならび

しよだいじようきよう

むしむしゆう

ほっしん

むしむしゆう

さんじん

に諸大乘経の無始無終は、法身の無始無終なり。三身の

むしむしゆう

ほけきよう

ごひやくじんてん

しよだいじようきよう

は

無始無終にあらず。法華経の五百塵点は、諸大乘経の破せ

がや しじよう

は

ごひやくじんてん

だいにちきようとう

ざる伽耶の始成これを破したる五百塵点なり。大日経等の

しよだいじようきよう

まった

ぎな

諸大乘経には全くこの義無し。

ほうとう

ゆげん

じゆ

ゆじゆつ

みろく

うたが

じゆりようほん

はじ

宝塔の涌現、地涌の涌出、弥勒の疑い、寿量品の初め

さんかいしししよう

みろくぼさつりようげ

もん

ほとけ

けう

ほう

と

の三誠四請、弥勒菩薩領解の文に「仏は希有の法を説きた

むかし

き

ほとけ

けう

ほう

と

もう。昔よりいまだかつて聞かざるところなり」等の文こ

だいにちきようろつかん

くようほう

かん

こんごうちようきよう

れなり。大日経六卷ならびに供養法の卷、金剛頂経、

そしつじきよう

もろもろ

しんごんぶ

きよう

なか

さんしししよう

蘇悉地経等の諸の真言部の経の中には、いまだ三止四請、

さんかいしししょう にじょう こう こく みようごう なんしんなんげとう もん み  
三誠四請、二乗の劫・国・名号、難信難解等の文を見ず。

と い ごじょう しんごん  
問うて云わく、五乗の真言、いかん。

こた にじょう しんごん し したい じゅうにいんねん ほんご  
答う。いまだ二乗の真言を知らず。四諦・十二因縁の梵語

あ ほっしんびようごう え  
のみ有るなり。また法身平等に会することあらんや。

と い じかく ちしようとう りどうじしょう ぎ そん  
問うて云わく、慈覚・智証等、理同事勝の義を存す。い

だいしとう す  
かでか、これらの大師等に過ぎんや。

こた い にん なん ほとけ いまし  
答えて云わく、人をもつて人を難ずるは、仏の誠めな

なん なんじ ほとけ せいかい いはい きようもん  
り。何ぞ汝、仏の制誠に違背するや。ただ經文をもつて

しょうれつ ぎ そん  
勝劣の義を存すべし。

難なんじて云いわく、末学まつがくの身みとして祖師そしの言ことばに背そむかば、これ  
を難なんぜざらんや。

答こたう。末学まつがくの祖師そしに違いすること、これを難なんぜば、何なんぞ  
智証ちしよう・慈覚じかくの天台てんだい・妙楽みようらくに違いすること、何なんぞこれを難なんぜざ  
るや。

問とうて云いわく、相違そういいかん。

答こたえて云いわく、天台てんだい・妙楽みようらくの意こころは「已今当いこんとうの三説さんせつの中なかに

法華経ほけきように勝すぐれたる経きようこれ有あるべからず。もし法華経ほけきように勝すぐれ

たる経きようこれ有ありといわば、一宗いっしゆうの宗義しゆうぎこれを壊やぶるべし」

よし

そん

だいにちきよう

ほけきよう

すぐ

の由これを存す。もし「大日経は法華経に勝る」といわば、

てんだい

みようらく

しゅうぎ

やぶ

天台・妙楽の宗義たちまちに破るべきか。

と

い

てんだい

みようらく

いこんとう

しゅうぎ

しやうこきようもん

問うて云わく、天台・妙楽の已今当の宗義は、証拠経文

あ

に有りや。

こた

い

あ

ほけきようほっしほん

い

わ

と

答えて云わく、これ有り。法華経法師品に云わく「我が説

きやうてん

むりようせんまんおく

すで

と

いまと

くところの經典は無量千万億にして、已に説き、今説き、

まさ

と

なか

ほけきよう

もつと

当に説くべし。しかもその中において、この法華経は最も

なんしんなんげ

とううんぬん

きやうもん

これ難信難解なり」等云々。この経文のごとくんば、

ごじゆうよねん

しゃか

と

いつさいきよう

うち

ほけきよう

五十余年の釈迦の説くところの一切経の内には法華経は

もつと だいいち

最も第一なり。

なん

い

しんごんし

い

ほけきよう

しゃか

と

難じて云わく、真言師の云わく「法華経は釈迦の説くと

いつさいきよう

なか

だいいち

だいにちきよう

だいにちによらいと

ころの一切経の中に第一なり。大日経は大日如來說くと

きよう

ころの経なり」。

こた

い

しゃかによらい

ほか

だいにちによらい

えんぶだい

答えて云わく、釈迦如来より外に、大日如来、閻浮提に

はつそうじようどう

だいにちきよう

と

いち

おいて八相成道して大日経を説けるかへこれ一。

ろくはらみつきよう

い

かこ

げんざい

しゃかむにぶつ

と

六波羅蜜経に云わく「過去・現在ならびに釈迦牟尼仏の説く

しよきよう

わ

ごぞう

なか

だいが

ところの諸経を分かちて五蔵となし、その中の第五の

だらにぞう

しんごん

しんごん

きよう

しゃかによらい

しよせつ

陀羅尼蔵は真言なり」。真言の経は釈迦如来の所説にあら

ずといわば、きょうもん 經文に違いすへこれ二へ。我わが説とくところの

經典」等の文は、きょうてん 釈迦如来しゃかによらいの正直捨方便しょうじきしゃほうべんの説せつなり。

大日如来だいにちによらいの証明しょうみよう、分身ふんじんの諸仏しよぶつ広長舌相こうちようぜつそうの經文きょうもんなりへこ

れ三へ。五ご仏章ぶつしょうことごとく、諸しよ仏皆ぶつみな法華經ほけきようを第一だいいちなりと説とき

給たまうへこれ四へ。要ようをもつてこれを言いわば、如来によらいの一切いっさいの

所有しよいうの法ほう乃至ない皆みなこの經きようにおいて宣示せんじけんぜつ顯説とううんぬんす」等とう云々。この

經文きょうもんのごとくんば、法華經ほけきようは釈迦しゃかの説とくところの諸經しよきようの

第一だいいちなるのみにあらず、大日如来だいにちによらい・十方無量諸佛じつほうむりようしよぶつの諸經しよきようの

中なかに法華經ほけきよう第一だいいちなり。この外ほか、一いち佛二佛ぶつにぶつの説とくところの

しよきよう なか ほけきよう すぐ きよう あ い  
諸経の中に、法華経に勝れたるの経これ有りと言わば、

しんよう だいにちきようとう もろもろ しんごんきよう なか  
信用すべからずへこれ五。大日経等の諸の真言経の中

ほけきよう すぐ よし きようもん な ろく ほとけ  
に、法華経に勝れたる由の经文これ無しへこれ六。仏よ

ほか てんじく しんたん にほんこく ろんじ にんし なか てんだいだいし  
り外の天竺・震旦・日本国の論師・人師の中に、天台大師よ

ほか にんし しましやく なか いちねんさんぜん みようもく な  
り外の人師の所釈の中に、一念三千の名目これ無し。も

いちねんさんぜん た しょうあく ぎ な しょうあく ぎ  
し一念三千を立てざれば、性悪の義これ無し。性悪の義こ

な ぶつぼさつ ふげんしきしん ふどう あいぜんとう こうぶく かたち  
れ無くんば、仏菩薩の普現色身、不動・愛染等の降伏の形、

じっかい まんだら さんじゆうしちそんとう ほんむこんぬ げどう ほう おな  
十界の曼荼羅、三十七尊等、本無今有の外道の法に同じき

かへこれ七。しち

と い しちぎ なか いちいち なんぜい あ  
問うて云わく、七義の中に一々の難勢これ有り。しかり

といえども、六義はしばらくこれを置く。第七の義、いか

ん。華嚴の澄観、真言の一行等、皆、性悪の義を存す。

何ぞ諸宗にこの義無しと云うや。

答えて云わく、華嚴の澄観、真言の一行は、天台の立つ

るところの義を盗んで自宗の義と成すか。このこと余処に

勘えたるがごとし。

問うて云わく、天台大師、玄義の三に云わく「法華は衆経

を総括す乃至舌口中に爛る。人情をもつて彼の大虚を局

ることなかれ」等云々。釈籤の三に云わく「法華宗極の旨

りよう

しょうもん

き

じそう

けごん

ほんにや

を了せずして、声聞に記するは事相のみにして華嚴・般若

ゆうずうむげ

おも

かんぎよう

や

した

の融通無礙なるにしかずと謂う。諫曉すれども止まず。舌

ただ

なん

うたが

ないしい こんとう

みよう

の爛れんこと何ぞ疑わん乃至已今当の妙、ここにおいて

かた

まよ

したただ

や

けほう

固く迷えり。舌爛れて止まざること、なおこれ華報なり。

ほうぼう

つみ

くじようこう

なが

とううんぬん

謗法の罪は、苦長劫に流る」等云々。

てんだい

みようらく

しゃくまこと

なんさんほくしち

もし天台・妙楽の釈実ならば、南三北七ならびに

けごん

ほつそう

さんろん

とうじ

こうぼうとう

した

ただ

なん

うたが

華嚴・法相・三論・東寺の弘法等、舌の爛れんこと何の疑

ないし

くじようこう

なが

もの

いあらんや。乃至「苦長劫に流る」の者なるか。これはし

ばらくこれを置く。お

じかく ちしようとう まのあた

しゆうぎ う

もの ほけきよう

慈覚・智証等の 親りこの宗義を承けたる者、法華経は

だいにちきよう

おと

ぎそん

ぎ

大日経より劣るの義存すべし。もしその義ならば、この

ひとびと

したこうちゆう

ただ

くじようこう

なが

人々の「舌口中に爛る」「苦長劫に流る」はいかん。

こた

い

ぎ

さいじよう

なん

ぎ

くでん

あ

答えて云わく、この義は最上の難の義なり。口伝に在り

うんぬん

云々。

ぶんえいがんねんきのえねしちがつにじゆうくにち

しる

にちれん

かおう

文永元年甲子七月二十九日、これを記す。

日蓮

花押